
星屑の哀歌

珠城 綵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の哀歌

【Nコード】

N8187Z

【作者名】

珠城 綵

【あらすじ】

隕石が落ちて生態系が壊れた地球。ゆっくりと滅びを辿る生物に隕石と一緒に降ってきた謎の生命体が生物にとり憑いて他の生き物を襲う中、瑞希をはじめとした病院の入院患者は院内に立てこもって生活を続けていた。

(1)

真っ暗な闇の中。

独りぼっちになってしまった僕は言葉を紡ぐ。

『流れ星ってね……、宇宙を旅してて、仲間とはぐれちゃったの。ずっとずっと一人ぼっちで旅を続けて……』

そうしてるうちに地球を仲間だと勘違いして、落ちてきたんだって。それが、たまたま、今回はおつきな迷子で、流れ星にならないで、地球に落っこちちゃったの。

母様が言ってたんだ。…ホントだよ?』

まだ夜は、明けない。

光はどこにあるんだろう?

…僕だけの、光は。

2

20XX年、巨大な隕石の落下により地球は甚大な被害を受けた。奇跡的に落下点が南太平洋だった為、大陸がひとつ消滅するのはかろうじて免れた。

しかし、生命の循環を、生き物の暮らす環境を壊すには十分すぎたのだ。

衝突の際の衝撃による、激しい地震。

局所異常気象。

地軸の変化。

海水面上昇による、臨海都市部への津波と低地の水没。

気温の変化が著しいのはいうまでもなく、空気中の成分の大きな変化。

それに塵による日光の遮断と低温。

これらによって、生態系も完膚なまでに破壊し尽くされてしまった。はっきり言って、古代に恐竜が滅んだのと同じく、人類が滅亡してもおかしくないくらいの被害。

だが、人々は生き残った。

いや、正しくは生き残ってしまった、というべきか。

運よく災禍を逃れ、途方に暮れていた人々に生きる道を与えたのは、皮肉にも、この悪夢の原因だった。

隕石に含まれていた、謎の寄生型生命体。

生ける全てのものに取り憑いたそれら……《星屑》は苛酷な環境を生き延びることが出来る強靱な肉体を与え、地球上の生物に寄生し始めたのである。

【西病棟三二六号室】

「みずきお姉ちゃん。ほら、できたよ、つるー！」

その楽しそうな声に導かれて視線を上げると、ベッドの上で一生懸命折り紙と格闘していた少女が顔を上げたところだった。

雪のように白い肌に、漆黒の長い髪。くりくりの瞳が輝いている。手には少し皺くちやになりながらも、何とか形を保っている鶴が乗っていた。可愛らしい顔に浮かぶ笑顔はなんとも誇らしげだ。

「上手に折れたじゃない。すごいすごい！」

私は微笑を浮かべ、少女の頭を撫でる。サイドテーブルにはたくさん再生紙で出来た鶴たち。

その鶴の群れを見た少女は、ちょっとだけ悔しそうに笑う。

「お姉ちゃんに比べればまだまだだよ。わたしも早く上手に折れるようになりたいなあ……」

「未来ちゃんならすぐに上手くなるって。すぐに私を追い越しちゃうかもよ？」

「えへへ……。ありがとう、みずきお姉ちゃん。あのね、今度は紙ヒコーキ作りたいな」

褒められてはにかむ未来を見ていると、自分のことのように思えて、嬉しさに目を細める。そして、リクエストに応え、紙飛行機を作ろうと紙を取り出した。

「瑞希、あまり未来に無理させるなよ。未来はまだ病み上がりなんだからな」

病室の戸口から声が響く。

いったいいつからいたんだろう？

半ば呆れたように私達を見る、二十代後半の白衣の長身の男で私達の主治医。

…全然気配に気づかなかった、いつもじゃありえないのに。

「分かってるよ、拓斗兄さ…いや、鈴木先生」

ちよつと強く言われて、少しむっとなつてしまう。私のことを気遣っているのは分かるんだけど。

分かってるけどさ！もつと言い方つてもんがあるじゃない！

つかつかと拓斗兄さんは未来のベッドに近づくと軽く腰掛けた。

「先生、みずきお姉ちゃんは悪くないんです。あたしがお願いしてここに居てもらっているから…。だから、お姉ちゃんをゆるしてあげてください」

泣きそうになつて弁明する未来に兄さんは苦笑すると、頭をポンポンと叩いた。どうやら、本気で兄さんが怒っていると思つたみたいだ。

…素直でかわいいなあ。

「そんなことを言わなくても…、未来、俺は瑞希のことを怒っていないから大丈夫だよ。俺は、未来も瑞希も、ここにいるみんなが心配なんだ。こつやつて、今生きていることはとっても幸せなことなんだぞ」

未来を見つめて言う、拓斗兄さんの言葉には、とても重みがあつた。惑星の半数ほどにもものぼる人間が命を落として、生き残つた中でも自我を保っているのが決して多いとはいえない現状。この病院の患者も大半は帰らぬ人となつたか、生前の姿を残していない。

それもこれも、《星屑》の侵略が物凄い勢いで進んだから。

《星屑》の精神侵食は、現代を生きる私たちにとって、最大の弱点を突いた攻撃だと思う。強い《生きる意志》がない限り、小さな侵略者たちは意志を蝕み、獣の血肉を嚼る異形と成り果てるという。闇に生きる異形は地上や地下を徘徊し、私たちを無慈悲にも襲う。

「まあ、顔色もいいみたいだし、元気なことはいいことだ。どこか具合の悪いところはないか？」

その問いに未来は少し思案げな顔をする。一瞬、私は硬直したが未来はまた笑顔を見せたからほっとした。

「ううん、大丈夫。ほら、ずっと眠ってたから、調子がいいんだよ、きつと」

「ならいいんだが…。具合の悪いところがあったらちゃんと訊くんだぞ？」

「はい、先生」

浮かぶのは安堵。

未来は、ついこの間まで…。そう、三年間眠り続けていた子だった。交通事故で脳を損傷し、二度と目覚めることがないといわれていたらしい。

そんな彼女が目覚めたのは奇跡としか言いようがないと思う。《星屑》の副作用のおかげで脳機能が改善されたらしい。寄生者にとっては、ただ単に暮らしやすい環境を作ろうとしただけなんだろうけど、未来にとってはかなりの恩恵だった。

しかし、彼女が目覚めたときには、一番喜んだであろう両親は、すでに他界。記憶に穴を空けてひとり残された未来はそのまま病院で暮らし、何かと私も世話をしたり遊んであげることが多かった。

「…それと瑞希、君も病人なんだ。子供たちと遊んであげるのは嬉しいが…」

「自分の体のことは一番良く分かってるつもり。紙飛行機を作っただけなら部屋に戻るよ」

「そうしてくれれば助かる」

拓斗兄さんは気遣うように言ってくれるけど、私はすぐさま紙飛行機作りを再開した。といつても、一分も経たないうちに作り終え、サイドテーブルに置くと椅子を立った。

「未来ちゃん、あんまり遊んであげられなくてごめんね。また明日来るから、いい子にしてるんだよ？」

「うん、わかった。だけど、また折り紙教えてね、約束だよ？」

にこりと微笑むと手を振って、先に腰を上げた拓斗兄さんに続く。そして、ベッドの上から元気な声。

「バイバイ、みずきお姉ちゃん！」

その声を背中に受け、二人で病室を出た。遊びまわる子供たちの間を縫って、病棟の奥へ。

「みんな元気そう……病気で弱っていたなんて、嘘みたい」

しみじみ呟いた。

私を含め、何かしらの病気を持ってベッドから出られなかったり、歩けなかった子供たちも大勢いたんだ。生まれつき心臓が弱かったのに、元気に廊下を走り回っている子もいるし、植物状態から意識を回復した未来のような子もいる。隕石の落下で得たものは確かに大きい。

しかし。

この病院の大人の入院患者の多くや、子供たちの親たちは命を落としていた。子供たちのほとんどが孤児なのだ。

でも、目の前の辛い病気から解放された子供たちの笑顔を見ていると、こう考えてしまう。いや、考えずにはいられない。

この刻がいつまでも続くといいな、と。

【中央渡り廊下】

西と東の病棟をつなぐ廊下の窓から外の様子が伺える。枯木の下を歩く無数の影を見、思い出したことがあった。

「そういえば、さつき自警団の人達が着ていた。なんでも、実弾が大量に手に入ったから地下の掃除をしたいらしい」

「地下の…?」

傍らを歩くハトコは怪訝そうな顔をした。

この病院の地下には、ほとんどの病院と同じく霊安室や手術室とい

った陰気な場所が多い。また、取り残された人達も多いらしいとい
う、噂の場所。封鎖されてかなりの時間がたつが、いまだに物音が
絶えないところを見ると、まだ生きているらしい。
まあ、基本的に栄養素は《星屑》が使い回しをして、俺らが食事
をあまり必要としないのと同じ原理なんだろうが。

「みんな、こんなことになるまではおんなじ人間だったのに…」

瑞希のため息とともに吐き出される呟き。

横顔は悲しみに暮れ、瞳は人外となつてしまった者達への深い憐れ
みが含まれている。

「自警団の人達についてはあまりいい話は聞かないしな。なるべく
関わらないほうがいい」

外の様子をもう一度見ながら言った。今度ははっきりと完全武装の
男たちが二・三人いるのが確認できた。

自警団は人に害なす異形……《甲化》した者を狩る実戦部隊。も
ともとは危険から人々を守ることが第一に結成された組織だった。
しかし、主な構成員が異形に恨みを持つものが多く、一切容赦はし
ない。

一度だけ、討伐を行なっている現場を見たことがあった。

彼らは、怨嗟と怒りにより統制され、慈悲など持ち合わせない氷の
ような双眸をし、銃器を使い《星屑》を駆る様子は、まさに夜叉の
ようだった。その凶暴性があつて、殺戮集団と恐れられている。

しかし、それはどうでもいいこと。俺は瑞希や未来、それにほかの
子供達を守ればいい。

俺がここにいる存在理由は、それだけだ。

「とにかく、君は少し体を休めたほうがいい。…この病院の中でも体調が優れないほうなんだからな」

「うん、そうするよ。心配かけてごめん」

珍しく素直にそう答えた瑞希は自分の病室の前で立ち止まった。

瑞希は足りなくなつた看護師達の変わりによく子供達の面倒を見てくれている。しかし、もともと彼女はかなりの重症患者で、彼女の両親から何とか病気を治してほしいと託された。

大人びた雰囲気を持っているが彼女はまだ高校生であり、この特殊な環境におかれてからは精神面での負担が大きいようで、体調を崩しやすかつた。それにほかの人達と違って、彼女にはあまり《星屑》の副作用 健康面の改善が現れていないような気がする。

「じゃあ、俺はほかの子供達の様子を見てくる」

部屋に入った瑞希に戸口から声をかける。それに彼女がひらひらと手を振り、応じてベッドに転がり込んだのを確認してから扉を閉め、巡回を再開した。

【西病棟三二六号室】

外から入ってくるつめたい風なんかほつといて、あたしはお姉ちゃんに作ってもらつた紙ヒコーキで遊んでいた。

夜になると明かりがなくなつちゃうから、今遊ばないと、また明日つてことになっちゃうし。

「みずきお姉ちゃんのヒコーキはよく飛ぶなあ……」

折りかたをマネして作ってみたんだけどなあ。

あたしが作った紙ヒコーキは、なかなかあつちまで飛んでいかないけど、お姉ちゃんが作ったのは、ずっとふわふわ飛んでる。本当はお姉ちゃんの紙ヒコーキをばらしてみたいんだけど、開いたら元にもどせない気がするし……。

明日教えてもらおうかな。

「ま、いつか」

自分で作った紙ヒコーキはくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

手元には、いろんなところにぶつかって形がくずれたお姉ちゃんの紙ヒコーキ。もっと大空を飛べればいいんだけどなあ。部屋のすみよってみると、この部屋でもけっこう広いみたい。ろつかまで出て遊ぶとおこられちゃうけど、ここだとおこられないし、もっと飛べるかな？

「…えいつ! ……つて、あゝ!」

そういえば窓が開いてたことをすっかり忘れてた。勢いよく飛び立ったおねえちゃんの紙ヒコーキは、元気に、ホントに空までいつちやった。

追いかけても間に合わなくて、ゆっくり紙ヒコーキは中庭へと落ちていく。

「どっしりよっ! …?」

せっかくお姉ちゃんに作ってもらったヒコーキが……。まさか、無くしたなんていえないよう……。

「まだ明るいし、すぐにもどればおこられないよ…ね…?」

ろっかを見て、誰もいないのをかくにんしてから、ヒコーキを探しにろっかを走り出した。

【東病棟三五九号室】

「瑞希っ！未来が来ていないか…！」

「……え…?」

扉を開く音とともに、血相を変えた拓斗兄さんが入ってきたのを、知覚するのに数秒。そして、その言葉を理解するのに、さらに数秒。眠りから覚めたばかりの、ぼけつとした脳に一気に血が逆流した。

「未来ちゃんがいなくなつた!?何でまた…」

「わからん…!」

不安を隠せない拓斗兄さんは、病室を出ようと急ぎ足で踵を返す。病院はこの階とひとつ下の階だけで世界が完結していた。一步この世界から出ると、死と隣り合わせの場所となってしまう。普段から子供たちには絶対に出ないようにといつていたんだけど…。

まさかとは思っただけど…。

どうやら一人で兄さんは未来を探すつもりみたいだけど、黙ってみ

ているわけにもいかない。急いでベッドから起き上がろうとするが、貧血のせいで動きがのろく感じる。

ああっ、病気であることが恨めしい！

「待つて、私も行くっ！人手の多いほうがいいはずだから」

何とか上着を羽織り、後に続く。

拓斗兄さんは心配そうな顔をしていたが、場合が場合なため、何も言ってこなかった。

太陽が傾いて緋色の光が差し込むなか、子供たちに未来の行方を知らないか訊ねて回る。しかし、一向に手がかりは掴めない。

子供たちは人をよく観察をするのが得意で、普段あまり見ないような人を見るとわかるもの。なのに、みんな口を揃えて未来のことは見ていないというんだ。

「そっかあ…。うん、ありがとうね」

「瑞希姉ちゃん、役に立てなくてごめん。未来に会ったらすぐに教えるから」

「わかった。お願いね」

今回も空振りに終わり、とうとう病棟の端まで来ちゃった。

拓斗兄さんは西病棟とひとつしたの階を探しているはず。そろそろ階段の前で落ち合う時間になっているんだけど…私は階段とは違う方向にある洗面所へとふらふらと足を進めていく。

口の中に広がる、鉄の味。
ここ最近治まっていた症状に追い討ちをかけるように、激しい目眩と立ち眩みが体を襲う。

「こんなところで……！」

さつき起きてから、なんか身体の調子がおかしい。

何とか洗面所の流しの前まで達すると、口の中の痰を吐き出す。歯茎から出血した薄い紅色の血が数箇所から出ている。鏡に映った顔は蒼白だった。

それが、未来がいなくなったということであせっているのが原因なのか、それとも病気のせいなのか……。
けど、そんなことを考える余裕などまったくなかった。

【エレベーターホール中央階段】

無人のエレベーターホールに自らの踏み鳴らす、カツカツという音だけが鳴り響く。

待ち合わせの時間が少し過ぎただけだというのに、気持ちが悪く落ち着かない。膨らんだ焦りが収まらない。

それだけ事態は深刻だった。

二階に住む患者が一階に降りていく少女を見た気がするというのだ。いつそのこと、彼女を置いてこのまま……。

「ごめんなさい、待った……よね？」

小走りでやってきた彼女は息を切らしてそう言うと、壁に手を突いた。相当苦しいらしく、肩で息をしている。

窓がなく、薄暗い此処でも雪の顔色ははっきりとわかった。見るものが言葉を失ってしまうほどの、血の気が失せた蒼白。まるで生気がない。

「そんな顔色で、君は……」

「私は大丈夫、だよ。…それよりも、未来ちゃんの居場所は？」

自分の身体の調子など棚に上げ、何事もなかったかのように尋ねる瑞希に閉口する。

ハトコは病気に罹ってからというものの、他人を助けるために自らを犠牲にするのを厭わなくなっていた。あたかも、自分を心配する人などいないかのように振舞うのが、とにかく癪に障る。

「大体わかったが……君は部屋で休んでいなさい。これは医者立場としての忠告だ。わかったな？」

彼女の目をしっかりと見つめ、強い口調でそう告げる。だが、案の定、瑞希は唇を噛み締め、反論しだした。

これは彼女を巻き込んでしまったときから、覚悟していたことでもあったが。

「兄さんが一人で行くって言うても、私も一緒に行く。未来ちゃんには私が面倒見るって決めただもん」

「君は子供か？さつき、自分で自分のことは一番わかっていると云っただろうが。そういうことは今の君の身体のことをよく考えてから言え」

こんな冷たいことを言う羽目になってしまったのは、ひとえに俺の過失だったのはいうまでもない。瑞希に伝えさえしなければ、こんなことにならなかつただろうに。もっとも、そんな後悔をしたって状況はちつとも良くなるらない。

それどころか瑞希は俯き、涙をこらえるように言葉を吐き出し始める。

「私は…未来ちゃんのことを本当に心配なの。だけどね…それと同じくらい、拓斗兄さんも、心配。だって…これから一階に降りるんでしょう?」

「……ああ、そうだ」

手にしていた非常用簡易電灯を見て気付いたのだろう。嘘をついてもしょうがなく、俺は素直に頷いた。

未来の目撃談は、ただ影のように見えただけで本人かどうかはわからないという。もしかしたら本当なのかもしれないし、見間違いのかもしれない。

だが、どちらにせよ《星屑》が積もっている、危険な場所までは病人である瑞希を連れて行くわけにはいかなかった。

あの《星屑》は、人の判断を狂わせる。

「未来を助けるために瑞希まで危険に晒すわけには、いかない。未来は必ず連れて帰ると約束する。だから、部屋で待っていてくれ」

力を込めた説得。

これで駄目だったらどうしようかと考えていたが、彼女は小さくうなずいた。

「そこまで言うなら……わかったよ。さすがに、この体調だと足を引つ張りかねないし、ね。だけど……絶対に約束だよ？」

こんなに静かなのに、消え入りそうなほど小さな声で彼女はそういうと、顔を上げて無理やり笑顔を作った。涙を流しながら。

「わかってくれてよかった……。それじゃあ、行ってくる」

いたたまれない気持ちになってほとんどその顔は見れずに、俺は非常階段の入り口に入っていく。

立ち入り禁止のテープを跨ぎ、悪夢の広がる地へと降り立とうと歩みを進める。

【一階総合待合室】

足が重い、息が苦しい、頭がくらくらする。もう、歩けない。

「……みずきお姉ちゃん、こわいよお……。助けて……」

真っ暗で、怖くて、思わずなみだが出る。

何とかしたに下りれる階段を見つけて、一階まで来たまでは良かったんだけど、真っ暗やみで何にも見えない。少し歩くだけでも、足元がすべりやすいから、すぐに転んじやう。それに、ここがいったいどこなのかもわからなくなっちゃった。

よく考えてみたら、あたしはこの病院の一階を歩いたことがなかったんだ。救急車で運ばれてから、ずっと目が覚めなかったから。

ホコリまみれのゆかに座り込んで、口を押さえてから深呼吸する。
ホコリは吸っちゃいけない気がした。

「ああ…、だれか……」

お姉ちゃんたち、たぶん心配してるよね…。

きつとこれは、お姉ちゃんのコークスを落としちゃって、だれにも何も言わないで探しにきた、あたしへの神様のおしおきなんだろうなあ…。

なんか、体がつめたく感じる。指先の感覚もなくなってきた。まるで、あたしの体じゃないみたい…。

「……らい……！」

空耳かな。だれかの呼ぶ声が聞こえるような気がした。

呼びかけに応えたい。

でも、もう力が出ない。大きな声も、でない。

壁にぐつたりと寄りかかると、自分の体を見た。

周りにたくさんあったホコリが、うでに集まっていた。うではみがあった鉄の表面のようにてかてか光っていて、なんだか気持ち悪い。

だけど、それが当たり前のようないきがしてきて、おどろく気持ちは、ない。

「ああ……ああアアアア……！」

声が勝手に出て、急に頭にぼんやりと雲がかかってくる。体は思うように動かせない。石になっちゃったみたいに。

パタパタとかけてくる足音。

急にひらける視界。

周りが暗く感じない。

「……………未来……！」

ああ、みずきお姉ちゃんが見える。
うれしい……、うれしいんだけど……。

「……きちちゃ、ダメ……！」

声はでた。必死に、お姉ちゃんに呼びかける。

でも、こんなちっちゃな声だと、きつと聞こえない。
心に、届かない。

「こない……で……」

助けに、来てくれたのは、とつても、うれしいよ……。
だけど、今、お姉ちゃんを、近くて見たら、あたしは、きつと……。

きつと、お姉ちゃんを、たべちゃう。

(2)

【一階総合待合室入り口】

私は結局、兄さんとの約束を破ってしまった。

あの後すぐに、ナースステーションにライトを取りに行つて、一階に下りた。やっぱり心配で、いても立ってもいられなかったから。

叱られることは十分覚悟している。

その上で私はここに来た。

「未来ちゃん、どこにいるの…！いるなら返事をして」

拓斗兄さんの足跡はきれいさっぱり消えていたから、どつちにいっただかはわからない。床の埃が意図的に足跡を消そうと動いているようにも感じる。

そもそも、この埃こそが《星屑》なのだから、動いていたって不思議ではない。

身体に何か張り付く感覚。きつと服の中まで《星屑》が入り込んでいるんだ。そうやって、皮膚からも入り込んで身体をのっとうとする。これに抵抗するための有効な手段はほぼ一つしかないといわれていた。

気持ちを強く持つこと。

今の私には簡単なことだった。

未来を絶対に助ける。この想いだけで動いているんだから。

「未来ちゃん、どこ……!」

この暗闇の中ではライトの一筋の光はあまりにも心もとない。明かりを持たないで入った未来はどれだけ心細い思いをしているだろうか。闇に包まれたこの病院は私の知っている場所ではないような気がして、一歩間違えば私まで迷ってしまいそうだ。

「……!?!」

か細い少女の叫び声が聞こえた、ような気がした。声を追って駆け出そうとするが、身体がついていけない。といっても、さっき上の階にいたときよりは随分マシで、出血は治まっているし、早歩きぐらいはできる。

高濃度の《星屑》を吸い込んでいるためだろうけど、それと同時に身体には《星屑》がかなり溜まっているはずだ。今、調子がいいからっていつまでも副作用の恩恵だけに頼ってられないだろう。

・・・いつかは代償を払わなければいけないときが来る。

「未来ちゃん…いるのっ!?!」

大量にあったはずの椅子が撤去された待合室に足を踏み入れる。足元に違和感。急に床のざらざらした感触があまりなくなつた。光を当てると、《星屑》が放射線状に広がっているのを確認できた。その中心へと光を向けると…。

「未来ちゃんっ!!!」

壁に寄りかかるように倒れている未来が目に入る。その周りには大量の《星屑》が囲み、蠢いている。

「お姉ちゃん…はやく……にげ…て」

呻くように発せられる制止はもちろん無視。新たな獲物に集まってくる《星屑》も無視。

黙って身体を乗り出し、必死に手を伸ばして未来の身体に触れる。

しかし、指先で感じたのは硬質化された冷たい皮膚で、生き物の温かみなど、微塵もなかった。

それでも、諦め切れなかった。

そんなことだけで、未来を見捨てたくなかった。

「未来ちゃん、諦めちゃ駄目っ。…約束したでしょう、明日、また一緒に折り紙折るって!!」

返事は、ない。

そのかわり、うつむいていた顔を上げ、瞳に涙をためて嗚咽しだした。その双眸はまったく彼女のそれとは異なっていた。

異様なまでに開ききった漆黒の瞳孔に、黄金色の虹彩。

私は間に合わなかったんだ……侵食が…《甲化》が抑えきれないところませ進行してしまった。

「みずき…お姉ちゃん、あたしが…だれかを…殺しちゃっ前に……殺して…」

「未来ちゃん、私にできないよ…そんなこと」

涙を流して訴える未来にそう答えて、抱きしめた…。

【一階エントランスホール】

完全な暗闇の中、未来の探索は困難を極めていた。相手の目的が分からない以上、しらみつぶしに探すしかない。時間が経つのが、早く感じてならない。

「あれ、鈴村先生じゃないですか。どうしてこんなところに？」

突然、背後から場違いな幼い声がかかる。後ろを振り向くと笑みを浮かべた少年と、黒ずくめの男が四人立っていた。

自警団を見て、背中にじつとりといやな汗をかいていく。何だって、こんな最悪のタイミングで…。

「…ええと、遥君だったか？いや、実は…」

「名前、覚えていてくれたんですね。名前で呼ばれると嬉しいですよ。周りがこんな人達ばかりだから、なかなか呼んでくれないんですよ」

話を遮り、本当に嬉しそうに自警団の小隊のリーダーであるらしい遥は笑った。

「母様がつけてくれた…せつかくの名前、呼ぶ人がいないともったいない。で、何でこんなところにいるんですってっけ」

「ここに迷い込んでしまった子供がいて…」

「それはそれは…大変ですね。僕たちもお手伝い致しましょう」

「そうしてくれれば助かるな。じゃあ、私はあっちを探してくる」

話を聞いて、かわいらしい顔に人を喰ったような笑みを浮かべる遙から、少しでも遠ざかろうとその場から立ち去った。

あんな子供ですら、恨みを擁いて生きているのかと思うとぞっとした。

エントランスを抜け、今度は診察室棟を見に行こうと廊下を小走りで進む。

「……………??」

待合室から、あるはずのない光が見えた。しかも、かなり奥のほうから。

「…誰かいるのか……………?」

返事はないが、無音というわけでもない。微かだが、すすり泣く声。足が自然と速まる。

しかし、見つかったのはいるはずのない人だった。

「瑞希……………君は何で来たんだっ！あれほど来るなといったのに！」

「拓斗兄さん……………未来ちゃんが…、未来ちゃんが……………っ！」

俺は《星屑》にまみれた瑞希が抱きしめている少女を見て、絶句した。怒りなどあつという間に冷めてしまった。

腕を真っ黒に《甲化》させ、瞳孔を開いた虚ろな金の目。顔に刺青のような模様が浮かび上がっている少女を未来だと認識するのにかかるの時間を要した。

《甲化》した人間は元には戻らない。全ての記憶を食われ、親しい人すら襲い、闇に生きるか殺されるしか選択できない、異形。

「未来ちゃんが……誰かを殺す前に殺してほしいって……。なんで、未来ちゃんがこんな目にあわないといけないの……！」

「瑞希……」

震える瑞希から未来の身体を預けると、そつと横たえた。荒い息で苦悶の表情を浮かべた、未来とは似て非なる存在は、この世の中では害なすものとしか認識されない。

これも未来の望んだことだと、自らに言い聞かせながら、瑞希に向きなおった。

「…瑞希、ここから離れよう。もうこの子は…未来なんかじゃなくなっただ」

【一階外来診察室前】

「だれか二人、鈴村先生の後を追ってくれないか。勿論、武装は怠らないでね」

辺りを見回している、四人の年上の部下にそう告げる。

「こここの危険区域は地下のはず。なぜ、そんなことを言う？」

「君は鈴村先生の話聞いていなかったのかい？」

軽く嘆息。

この自警団に所属する奴らといったら、本当に呆れるね。大概、心

が壊れているから目的のもの以外には興味を示さなくなっているから、ろくに人の話を聞かない。僕も人のことは言えないけど。

「まだ幼い子供が、この闇に吞まれて無事なわけないだろう。…と
いっても、たいした脅威にもならないだろうから、残りの二人はこ
っちで待機ね。大仕事が残っているんだから、あまり消耗したくな
い」

いくらかのやり取りを交わした後、二人が離れていく。

四人はあまりにも没個性的で、だれがだれだか分からない。同じ黒
の防弾ジャケットや制服・・・けれども、ひとたび戦闘ともなれば
能力で差が出る。この自警団の上下関係は純粹に力で決まり、僕は
この界限ではトップの狩り率を誇っていた。能力こそ全てで、個性
となる。

裡に秘めるは、絶望の光。

巻き起こすは、殺戮の嵐。

ああ、母様。今日も貴女を弔うことが出来ず。

・・・母様のいない世界なんて、何もないほうがいい。

自然と笑みが零れた。

【一階総合待合室】

信じられない思いだった。

未来をこんなところに置き去りにして逃げるだなんて！

「拓斗兄さん、何を言ってるの！そんなこと出来るわけないじゃないっ」

未来を大切に思っているのは、兄さんだって同じだと思っていたのに。でも、兄さんは首を横に振る。

「もう、自警団の奴らがこのすぐ近くまで来ているんだ。庇うと俺らまで殺られる。未来はそれを一番望まないはずだ…」

「そんなきれいごと…！」

怒り、不安、悲しみ…。

いろんな感情がスープのように混ざり合い、だんだん訳が分からなくなるとなる。

「…その一般人、今すぐそこを退け。流れ弾が当たったときの命の保障はしない」

唐突に加わった第三者の声。

暗闇から現れる黒衣の死神。

…自警団の狩人。

拓斗兄さんの顔は青ざめ、呻き声を漏らす。

「瑞希……」

拓斗兄さんに腕を引っ張られ未来から離れるのと、未来が起き上がるのは、ほぼ同時。

きれいな金の瞳は暗い中でもよく目立ち、見るものに畏怖を与える。

彼女は私たちには目もくれず、一直線に狩人との間合いを詰めるべく駆け出した。止めようにも、身体の硬直は取れない。

凄まじい、それこそ人間離れたスピードで肉薄する少女。呼応するように轟く銃声、続けざまに三発。決して威嚇射撃ではない。

「やめ……!!」

出したはずの叫びも遮られる。

肩から鮮血を滴らせてもなお、勢いを緩めない未来が腕を振り上げ、狩人を捉える。

黒曜石のように鋭利に研がれた、腕が。

「…アアアアアアツツ!!」

幼い少女のものとは思えない咆哮。続けてぼとりと何かが落ちる音と、男の悲鳴。

これらのことが瞬時に起きた。

あまりにも非現実的すぎて、頭の中が真っ白になる。

口の中に広がる、命の味。

むせ返る死臭。

そして、咳とともに抑えきれずに吐き出された大量の血。

体が傾き、そのまま倒れる。

やけに遠くから聞こえる拓斗兄さんの声、銃声、断末魔。ぱつぱつと意識が闇に落ちた。

【一階総合待合室出入口】

どうやら最後の一発で仕留めることが出来たみたいだった。異形は醜い叫び声を木霊させて、どさりと倒れた。

「それにしても、戦力が一人減るのは痛いねえ」

僕たちは暗視ゴーグルのおかげで、一部始終を見ることだけ出来た。一人が囷になって、あの小さな身体で腕を落とすだけの重たい一撃を放った直後の化け物の背後からもう一人が心臓を狙ったんだ。いくら《甲化》して身体能力を上げたからって、渾身の一撃を放った後だと動きが緩慢になる。

これは見方を犠牲にする上で成り立つ戦法だけど、薄い氷ほどしかない信用なんて、所詮こんなものでしかない。

だけど、これから大掛かりな掃討をするって事くらいは、頭の片隅に置いておいてほしかったけどね。

「二人とも、一応武装をしておいてよ。もしかしたら、あのお姉さんも《甲化》するかも知れないからさ」

「了解」

これは、ただの僕の勘。

あの、明らかに白っぽい血の色。それからこんな濃い《星屑》を吸い込んでなお、再生がほとんど行なわれない体質。

敵に回すと厄介かもしれない。

【一階総合待合室】

未来が殺された。
瑞希まで倒れた。

「くそっ……！」

何もかも俺が動く前に進んでいってしまう。

目の前には荒い息で苦しむ、瑞希。おそらく肺がやられたんだろう。大量の血を吐き、顔を真っ青にしている。明らかな酸素不足。もっと早く何かしらの処置をしておくべきだったのだ。こうなる前に。

俺らは何も食べないで生きてこれたのは、体内の《星屑》が物質を循環させつつ再生していたためだ。しかし、瑞希のように血を吐き出す行為は命を外に出すのと同義だったのだ。

なぜ俺は何もしなかったのだろうか。

いや、何も出来なかったのだ。

医療など根本から覆われてしまった現在、本格的な治療、投薬などは全く出来なかった。救急処置をしたところで何の意味もない。所詮、医者など役に立たなかったのだ。

時は無常にも過ぎる。彼女を救うため、今、出来ることは…。

ひとつだけあった。他人の血を取り込み、体内の循環物を増やすこと。

最初からひとつだけと決まっていた。でも、そう簡単に出来ることでもなかったのだ。人の命を呑むことになるのだから。きっと彼女はそんなことは望まないだろう。

「狂っているな、俺も…」

自覚したところで止められる衝動でもなかった。

ただ、俺は瑞希を救いたい。

うずくまる瑞希から離れ、先ほどまで戦闘を繰り返していた男たちの下へと歩み寄る。腕をなくした打ち回る男と、興味を持たず傍観を決め込む男。

「なにか？」

「少し血液を分けてほしいと思ってな。重症の患者がいるんだ」

なるべく感情が表にでないように声のトーンを下げる。男は特に何も思わなかったのか、床を這う仲間を指差す。

「奴でよかったら。どうせ、もう使い物にならん」

仲間をこつも簡単に売るのに大いに驚いたが、そんなこと、些細なことではなかった。

人を助けるために必死に勉強してきた俺が人を殺めるとはな。

自嘲すると、俺は男に向き直った。

【一階総合待合室出入口】

今に始まったことじゃないけど、人という生き物は醜いねえ。

血液の半分は失っている瀕死の部下から血を奪う医者を見ていると本当にそう思う。

まあ、部下っていつても大して能力の高いやつでもなかったし、そもそもあんな怪我じゃ、はっきり言ってお荷物。思い入れももちろんなし。処分してくれて良かったといえればよかったんだけどね。

このご時世、ろくな医療も出来ないんだから。

「さて、そろそろかな」

僕の考えから行くと、あのお姉さんは目が醒めてすぐに発狂する。

その後待つのは《甲化》。何せあんなに大事に思っていた女の子を、目の前で殺されたんだから。

真っ赤な鮮血が頬を伝う。

【一階総合待合室】

ここはどこ？私はいったい何をして…？

ひんやりとした床に、鼻につく生臭い匂い。

ああ、そうだ。未来がいなくなっ、せっかく見つけたのに、もう…。

フラッシュバックする記憶。金の瞳の未来が狩人と…。

「……っ！」

目を見開いて、体を起こす。

「瑞希、大丈夫か!？」

驚いた表情の拓斗兄さんが目に入った。なぜか血まみれで、顔にまで赤黒い痕をつけている。

・・・そんなこと、どうでもいい。

ふらつく体に鞭打ち、立ち上がると辺りを見回す。

・・・いた。

何事もなかったかのように足元にいる男を見ている狩人。一人は既に絶命しているようだった。

怒りに全てを任せて身体を動かしていく。身体の細胞の一つ一つに力が漲り、何でもできるような錯覚と高揚感が満ちる。病気になつてから一度もなかったことだ。

後ろから、兄さんの制止する声。

狩人が問いかける声。

もう、何も聞こえないし、何も見えない。

「私は、絶対あなたたちを赦さない…」

世界がどんどん明るくなっていくのがわかる。今になっても武器を構えず怪訝そうな顔をする狩人を嘲笑うと腕を持ち上げた。

「いつたいなにを…」

「あなたにも、未来と同じ痛みを与えてあげる」

足元の《星屑》が渦を巻く。それで異変に気づいたみたいだけど、もう遅い。

この空間の床に無尽蔵に存在する《星屑》が指先の空気中に無数の粒となって《甲化》、そして固定。

あたかも、打ち抜かれた直後の弾丸が静止しているよう。

「貫け」

声とともに、耳障りな音。どさりと狩人はくずおれる。血の海を作って。

全てが終わって、とびっきりの笑顔を作って後ろを振り返った。硬直した拓斗兄さんに浮かぶのは驚きと、未知への恐怖か。

「……君は……」

言葉が続かない兄さんに顎で向こうをさす。拓斗兄さんには見えな
いだろうが、狩人がまだ三人残っている。

《甲化》した人間を奴らは絶対に逃さない。きっと私も狩られるん
だろうな、と漠然と思った。

「兄さんはここにとって、すごく必要な人だよ。私はもう後戻りは
出来ないけど……貴方は私がいなくても大丈夫？」

勤めて明るい声音でそうたずねるのと後ろからの銃声で肩を挟られ
たのは、ほとんど一緒だった。

【一階総合待合室出入口】

「これは……」

僕は我が目を疑ったね。まさか、《星屑》に勝って《甲化》を使いこなした上に、外界結晶までやってのけてしまうとは。背後から膨れ上がる殺気。どうやら二人は殺る気満々のようだ。

「……先に行く。後方支援を頼んだ」

どちらかがそう一方的に告げると、拳銃のセーフティを早々に外した二人が先行する。

幾度か見たことがあるが、稀有な事例には変わらない。滅多に《星屑》に抵抗できる人間はいないから。知能も力も持ち合わせるために、ただの《甲化》人間の比じゃない戦闘能力を持ち合わせる。

お姉さんは、鈴村先生が絶対に射程に入らない場所に立っていた。薄く渦巻く《星屑》の内側に立つ姿は、まるで幽鬼みただけど、あれは……。

「あのときの母様みたいだ……」

あの姿は、封印していた記憶を容赦なく抉り出していく。

あの日、《甲化》の能力を使って僕を護ってくれていた母様は、後ろから仲間だと思っていた人間に討たれた。彼女らの本当の敵は、強大な力を得たことに恐怖し、嫉妬の念を抱き、排斥しようとする人間なんだ。

僕は、一体どうすればいいんだろう？

【一階総合待合室】

肩に傷を負っても、瑞希は顔色一つ変えなかった。《星屑》が血を吸い上げているのか、出血も程なく止まる。

彼女は完全に《星屑》を制御していた。現に次々に襲い繰る銃弾から、真つ黒なシエルターを作って防御を続けている。

黒の瞳は異様なまでに開いていたが、ほかに目立った《甲化》の現象は、ない。それに、ひどく落ち着いていて理性を保っていた。

「兄さんはどこかに隠れてて…危ないから。彼らの狙いは私だからね」

彼女は微笑すると身を翻して俺から離れていく。どうやら、俺は足手まといのようだ。…当たり前だが。

「…頼む、死なないでくれ」

「……努力するよ」

霧のような《星屑》に包まれた瑞希から離れて、カウンターの陰に身を隠す。といっても彼女から目を離すわけにも行かなかった。

銃撃は収まっていた。あちらも銃弾に制限があるから、そう簡単に無駄には出来ないようだ。その点、《星屑》ならばいくらでもある、瑞希のほうが有利か。

黒い嵐が晴れ、瑞希の背後に巨大な羽が顕れる。幾重にも重なった、蟲の羽。

様子を伺っている狩人に、彼女は声を張り上げて問う。

「私は、危害を与えない人を傷つけないと約束する！あなたたちの意思を示して！」

これが、瑞希の優しさであり、心の甘さ。奴らの答えなど、決まりきっているというのに。

「笑わせるな。貴様に殺す理由はなくとも、我らにはある！」

見え透いた返事とともに発砲。しかし、彼女の羽のガードは固く、決して届かない。低い振動音が室内に響き、風で《星屑》が舞い上がる。

「羽が……！」

瑞希は床をけり、体を中に浮かべて天井ぎりぎりまで羽ばたいた。追撃は全てかわす。

真っ黒な《星屑》の羽で、人が宙を舞う。ありえない光景に、ありえない身近な人物。陳腐な表現だが、今の瑞希は黒い羽を獲た妖精のようだ。

《星屑》に徐々に視界が遮られていく。目も、口も開いていられない。

そこに朗々と響く、妖精の囁き声。

「私には、もう幸せは手に入らない…きっと、これからも。だけど、誰かを護ることは出来るはず…このチカラを使って！」

最後に叫び終えるや否や、電が落ちていくような騒音があたりを包み込む。

直感が、動くなと訴えた。

【一階総合待合室天井付近】

心地よい、羽の伝える振動に身をまかせて空に躍る。

人影が見えなくなる。黒い雲に遮られて。

体の周りに出したビー玉大の黒い結晶が下へと降り注ぐ。さながら、地球に降り注いだ隕石のように。

鼓膜を叩く音で全ての音という音を掻き消し、塗り潰していき、終わったところには静寂だけが存在していた。カウンターの下にいた拓斗兄さん以外は、もう息絶えただろう。

…いいや、まだいる。

ぱちぱちと渴いた拍手。入口にいた少年だろう。あつちには意識的に降らせなかったんだ。無抵抗な人は、殺せない。

「君はいつたい…？」

また、《星屑》が床に沈殿し始める。晴れる視界には地にひれ伏す二つの影、カウンターの下から這い出した兄さん、そして、未来より少し年上ぐらいの少年。

「お姉さん、こんにちは。いや、もうこんばんは、かな。僕の名前は星崎遥。ただの狩人だよ。・・・お姉さんの名前は？」

笑みを浮かべて尋ねてくる遥君に私は違和感を覚えた。さっきまで《星屑》の嵐の中にいたというのに、まったく埃を被っていない。カウンターの下にいた兄さんさえ、あんなに《星屑》を叩き落とされているというのに。

「…私は瑞希」

「へえ、瑞希お姉さんって言うんだ」

私のすぐ近くまで来ながらそう答える。怪しい動きはなく、武器らしい武器も持っていない。

だけど、今までの中で一番圧力を感じる。身体の中の《星屑》も訴えている、同じことを。

「じゃあ、少し痛い目にあってもらおうかな。貴女の実在は、危険すぎる」

皮の手袋をした、まだ小さな手を掲げ、こちらを見つめてくる。

手の周りに靄がかかったのに気付いたところには、身体に変調が現れ始めていた。羽の振動が大きくなり、多くの《星屑》が制御を抜け出して離れていく。

ここは空中。羽が少なくなれば、間違いなく落ちて、この身体でも怪我は免れない。骨に直接入った傷は治りにくいから。

それでも、薄くなり始める羽で少年との距離を離していかなければならない。ここに降り立てば、あちらの思いつば。

さっきはあんなに簡単に集められた《星屑》を思うように集めなおせない。あの少年…遥君が集めているのは明白。

だけど、私と彼は同じはずなのに、なんで敵意を向けるのかわからない。そもそも、これが敵意なのかも、あの表情からは読み取れない。

床に降り立つと、じりじりとあとずさる。まったく気を抜けない。遥君は、いつそう笑みを深くした。

「それで逃げたつもり？そこはまだ、僕の影響下におけるよ？」

笑うと彼は集めた《星屑》を纏わせた腕を振るう。身長ほどに伸ばした《甲化》された腕が顕われたのと対照的に、私の羽…直接支配していた《星屑》すっかりなくなっていた。これじゃあ、最低限の防御しか出来ない…！

「初めてなのに外界結晶を出来るのは凄いなと思ったけど、支配力はいまいちだね。…さて、そろそろ終わりにしようか」

確実に迫り来る死の恐怖に駆られて反射的に、防御に残っていたものを結晶化し、打ち出す。

しかし、最後の希望も一気に距離を縮める少年の腕に取り込まれると、姿を消した。

やけにゆっくりと見える、真つ黒な腕が振るわれる瞬間。鋭い痛みを腹部に受けて、身体ごと、意識も吹っ飛んだ。

【一階総合待合室】

腕にお姉さんの重みを感じつつも、すっかり狙いは狂わせなかった。必死の形相でかけてくる、鈴村先生が十分受け止められるような方向に、思いのほか軽いお姉さんの身体を投げ飛ばす。

結局、僕はお姉さんを殺すことは出来なかった。…あまりにも母様の面影と重なっちゃたから。

鈴村先生は僕の期待にしっかり応えて、お姉さんを抱きとめた。

「なるべく手加減はしておいたつもりだよ。少し気を失っているだけだから、安心して」

《星屑》の支配をといてそう告げると、鈴村先生は困惑した表情を浮かべ、尋ねてくる。

「なんで、瑞希を助けた？お前は…」

「《甲化》した人間を憎んでるって？うん、確かにそうだよ。だけど、僕もこういう身体だから、可哀そうになっちゃってね」

当たってそうであつたたく違う理由を口にするだつて、本当の理由はあんまりじゃないか、さすがに。

だけど、一応納得したのか鈴村先生は何にも言つてこなかった。そうだ、ちゃんと瑞希お姉さんになんであんなことをしたのかは説明しないよね、これから危ない目に遭わないように。

「この身体、あまり誰からもいい目で見られないんだよ。人間にも《甲化》した奴らにも。だから、あまり目立つたことはしてほしくないんだよ。…ほら、さっき瑞希お姉さんこの力を使って誰かを護るっていつてたでしょ？」

そういうと、自分の革の手袋で覆われた手を見る。お母様を亡くしたときに一緒に失つた、肱から下を。

この力は人間や《甲化》した生き物に対しては大変有効な武器だけど、同じ能力を持った相手と戦わなければならないときは博打的な要素をはらむ。今回だつて、僕よりもお姉さんのほうが支配力が強かったらどうなつていたことが。

「お姉さんが弔いの戦いに身を置かないことを心から祈っているよ。…そうそう、僕が《甲化》を制御出来てるってことは、くれぐれも自警団には内密にしてくれないかな。身の置き場がないといういろいろ大変だし、ね」

にっこり笑うと鈴村先生に背を向けて歩き出した。もうやることはやったし、なんか疲れた。精神的に。

それに、これ以上ここにいと瑞希お姉さんに心残りが出来そうで。

「わかった、秘密にする」

「ありがとう。それじゃあ、瑞希お姉さんに、どうかよろしく」

もうこの後、この人達に縁がないことを祈りながら、病院から立ち去った。

【一階階段前】

変わった狩人の少年が立ち去った後、気を失ったままの瑞希を負って階段の前まで戻ってきていた。

ここを昇れば、日常に戻る…ただし、未来のいない。

「……ん……」

背中から、小さな呻き声と身じろぎ。どつやらつちの姫君が起きたみたいだ。

「瑞希、大丈夫か？」

「兄さん…？私はどうして……？」

「痛むところは？」

「…特にない」

「そうか」

本当に手加減はしてくれてたようだった。背後では、瑞希が何でこついう風になっているのか頭を悩ましているようだ。記憶のない部分のところは、かいつまんで説明しなければならぬみたいだ。

「あの狩人の子供・・・遥だったか？あいつも君と同じように《星屑》を扱えることは分かてるな？」

「うん」

「遥が、あまり力を使わないようにしてほしいってさ。君だって誰かが傷つくのも、自分が傷つくのは嫌だろ？」

「…うん。そっか、あの子、助けてくれたんだ」

こつちからは顔が見えないが、たぶん安堵しているんだと思う。遥が、殺意を持っていなかったことに対して。

「…兄さんにも心配かけちゃったね。ごめんなさい」

「ごめん済むか。まったく、君は」

「あはは、そう…だよな」

口を尖らせていったことに対しての彼女の反応は薄い。まだ気に病んでいるんだろう。未来のことについて。

でも、死者は生き返らない。瑞希はそのことを、現実を受け入れなければならぬのだが。

「私は、立ち止まっちゃいけないんだよね。本当は」

「そうだ、上のみんなだっているんだから。俺らが暗い顔をしていたら、子供たちが心配する」

「大人って大変だよな」

「なら、まだ子供でいるかい？」

「私だって、もう大人だもん。子ども扱いしないでくれる？」

はじめて、瑞希が笑った。

一段一段階段が上がっていく。

「そういえば、さつき君は自分がいなくても大丈夫かって聞いたよな？」

「そうだね」

ずっと問われていてから考えていた、答え。

「…瑞希がいなくなっただ大丈夫なはずがないだろうが。せっかく出来た妹分がいなくなるなんて」

最後のは、言っただ自分で恥ずかしくなった。それが本当なのかは、自分でもわからない。

本当に、彼女が後ろにいてよかった・・・、なんていったって、今、

顔が真っ赤になっているのがわかる。

「ありがとう、拓斗兄さん。そう言ってくれて嬉しいよ」

今までと変わらない日常に戻るのは、確かに困難かもしれない。だけど、時間は止まってくれないし、いつまでも後ろを向いてもいられない。

だんだんと二階の扉が見えてくる。そこから漏れてくる、一条の光。その光が、俺らの道を照らしてくれる希望の光でありますように……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8187z/>

星屑の哀歌

2011年12月26日00時58分発行